

ヤンのよこぶえ

手島悠介・作

赤星亮衛・絵



ヤンのよこぶえ

手島悠介=作

赤星亮衛=絵



■著者紹介 手島悠介

1935年台湾高雄市に生まれる。学習院大学中退。

作品には『手紙になったリンゴ』『二十八年めの卒業式』『はばたけはとさん』『ふしぎなかぎばあさん』『むかしへとんだ犬』『かべにきえる少年』『まぼろしの村はどこに』『おにの子はホームラン王』など多数ある。訳本に『ぶんぶんぶるるん』がある。

* 現住所＝〒115 東京都北区桐ヶ丘
2-14 N15-8

■画家紹介 赤星亮衛

熊本県に生まれる。海老原喜之助画伯に油絵を学ぶ。タブロー制作のほか、絵本、さし絵の世界の仕事をつづけ、ユニークな作風で活躍中。児童出版美術家連盟会員。作品には『三びきのおばけ』『ぷっぷみみずく』『バオのおくりもの』『もりのなかよしはたがすき』など多数ある。

* 現住所＝〒227 柏市戸張1030-16

913

手島悠介

ヤンのよこぶえ

国土社 1980

71P 22×19cm (国土社の創作どうわ15)

基本カード記載例

ヤンのよこぶえ <国土社の創作どうわ15>

1980年 9月 1日 初版一刷印刷

1980年 9月 5日 初版一刷発行

著 者 手島悠介

発行者 長宗泰造

印刷所 厚徳社

発行所 国土社

〒112 東京都文京区目白台1丁目17-6

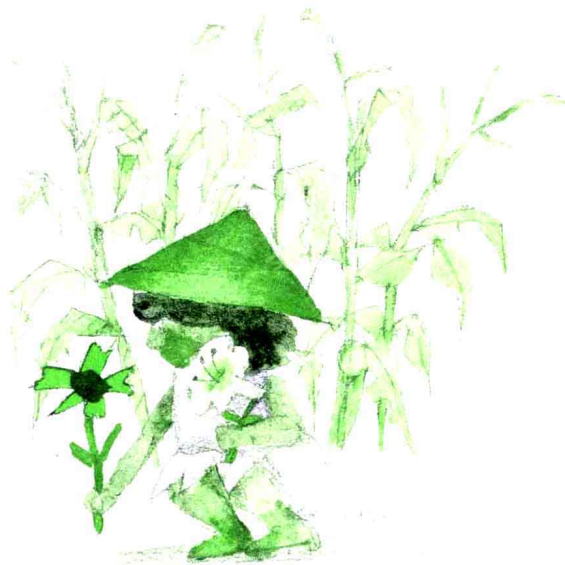
電話 東京943-3721／振替 東京6-90631

落丁・乱丁の本はお取りかえします。〈検印廃止〉



もくじ

1	ヤンとナナ	4
2	魔法 まほう のよこぶえ	11
3	お父 とう さんからの手紙	19
4	ブンの国の兵隊 へいたい たち	23
5	ミントーの町へ	33
6	ほらあなを通って	39
7	ヤシの小屋の王さま	49
8	耳をかたむけてごらん	57
9	さまようふえの音 ね	63



Ⅰ ヤンとナナ

「おにいちゃん、どこへいくの？」

みどりの草のおいしげるあぜ道を、妹のナナが、走っておいかけてきました。

「お母^{かあ}さんのところ。草かりにいくのさ。」

と、兄のヤンは、ふりかえって答えました。足ははだしで、手にはかまを持っています。

「わたしもいく。」

おさない五さいのナナの手をひいて、ヤンは、ほそいあぜ道を歩いていきました。

ヤンはまだ三年生なのに、家の仕事をよく手つだう子どもで

した。ひとりで水牛すいきゆうをおつて、田をたがやすこともできましたし、一年に二どずつある、田植え、いねかりの仕事も、けっこいちにんまえう一人前にできました。

ふたりは、お母かあさんのはたらいているピーナツ畑にやってきました。

「ヤン、きょうは学校、早かったのね。」

お母かあさんは、こしをのばしながらいいました。

「うん。きょうから午前じゆぎょうになつたんだよ。勉強をしないですむから、助かるよ。」

ヤンは、白い齒をにっと見せて、いたずらっぽくわらいました。

ま上から、炎ほのおのようにもえる太陽が、じりじりとてりつけてきます。草をかるヤンのひたいに、玉のようなあせが、じつと

りとにじんできました。

竹の皮で作った、大きなかさをかぶっているナナは、地面にぼうで絵のようなものをかいて、ひとりで遊んでいます。

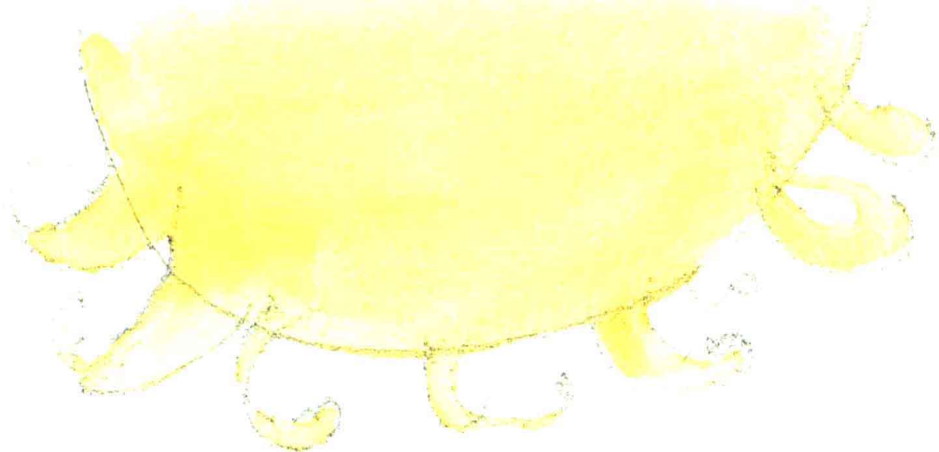
遠くには、お父さんとうが水牛すいきゅうをつかって、田をたがやしているすがたが見えていました。

こののんびりとのどかに見える南の国は、じつは、戦争せんそうにまきこまれていたのです。

となりのブンの国の兵隊へいたいが、この小さな国にせめこんできたのは、もう何年なんねんもまえのことでした。

ヤンの村でも、ときどき、てきのヘリコプターを見かけることがありました。

また、森の向こうで、ダダダダツと機関銃きかんじゅうの音がしたり、ば



くだんのはれつするドドーンという音が聞こえてきたり、いたい、どの村が焼かれていたのでしょう。一ばんじゅう、夜の空が、まっかにもえているようなことがありました。

その夜、ピーナッツをいれたおかゆに、さかなの干物というまずしい夕食がおわったあと、お父さんとお母さんが、いいあらそいをしました。

お母さんが、ひっしになって、お父さんにたのみました。

「おねがいします。子どもたちのために、どうか、いかないでください！」

お父さんは、きつく口をむすんだまま、となりのへやへいくと、銃を持ってでてきました。にぶく光るおそろしい銃を見て、ヤンとナナは、ぎくつとしました。こんなものを、お父さんは、

いつ、手にいれたのでしよう。

お母^{かあ}さんが、なきながら、お父^{とう}さんにしがみつきました。

「いけないで！ 万^{まん}に一つ^{ひと}、あなたが死にでもしたら、わたしたちはどうするの……。」

お父^{とう}さんは、静^{しず}かにいいました。

「いいかい、お母^{かあ}さん。わたしたちは、この国をまもりぬかなくはならないんだ。それこそが、小さなヤンやナナのためじゃないか。」

戦争^{せんそう}にいくんだ、とヤンは思いました。お父^{とう}さんは、兵隊^{へいたい}になろうとしているんだ、と。

「ヤン、ナナ、では、ちよつと家をるすにするよ。お父^{とう}さんが帰ってくるまで、お母^{かあ}さんと三人で、助けあってくらすんだ。」

お母^{かあ}さんのなき声が、いちだんと高くなり、おびえたナナが、

お母^{かあ}さんの足にしがみつきました。あつくなったヤンの目からも、なみだがあふれそうになりました。

お父^{とう}さんは、ヤンとナナの頭をゆっくりなで、かすかにほほえむと、だまって家をでていきました。

ヤンとナナの
目には、銃^{じゅう}を持
ったお父^{とう}さんの、
暗くほっそりし
た後ろすがたが、
黒い版画^{はんが}の絵の
ように、焼^やきつ
いてはなれませ
んでした。



2 魔法まほうのよこぶえ

お父とうさんがいなくなつてから、ヤンは、やんちやなところになくなつて、おとなしい、静しずかな子どもになりました。

すっかり口数くちかずのすくなくなつたお母かあさんを助けて、畑仕事から家の仕事まで、よく手つだいました。

ナナだけが、お父とうさんのいない家のなかでも、よくわらい、よく歌いました。ナナには、戦争せんそうのことが、よくわかつてはいないのでした。夜になると、いつものように、

「お母かあさん、お話して。」

と、おねだりするのです。すると、お母かあさんは、

「あしたのばん、ね。」

と、かならずいうのでした。

そのとき、ズシーンと遠くに音がして、まどから見ると、赤い火花が、暗いやみをひきさいて、どくの花びらのように、いくつもいくつも、空に向かってひらきました。

ブンの国のばくげき機きが落とす、なにかのばくだんでした。

「こわいよう！」

と、ナナの声がふるえました。

「ナナ、今夜こんやは、お話してあげましょうね。」

お母かあさんは、ナナをだきしめて、

「まえにも、してあげたお話よ。『魔法まほうのよこぶえ』、おぼえてるかしら。」

ばくだんの音は、やんだようでした。けれども、林でしょうか、どこかの村でしょうか、赤い舌したのように、炎ほのおがもえさかつ

ているのが、遠くからも見えました。

お母^{かあ}さんは、話しはじめました。

そのお話を、ヤンとナナは、竹であんだベッドによこになつて、聞きました。

ランプの炎^{ほのお}が、ちかちかとまたたいていました。

♣ お母^{かあ}さんの話 ♣

むかし、ひとりの若者^{わかもの}が、森のなかでかりをしていました。すると、

「助けてください！」

という、悲^{かな}しそうな声が聞こえてきました。

見ると、そこに、けがをした、きれいな娘^{むすめ}さんがたおれてい
るではありませんか。

「どうか、わたしを家までつれていってください。わたしの家は、この森の下のほらあなの、ずっとおくにあります。」

若者^{わかもの}は、娘^{むすめ}さんをせおうと、ほらあなにはいつていきました。ほらあなのおくふかくまでいくと、水が流れていて、一そうの小舟^{こふね}がつないでありました。

その小舟^{こふね}に娘^{むすめ}さんをのせ、ろをこいでいくと、なんともいえない、におうような美しい島があり、そこに水の国の王の都^{みやこ}がありました。

娘^{むすめ}さんは、水の国の王のたいせつな王女でした。水の国の王は、たいへんよろこんで、若者^{わかもの}へのおれいに、魔法^{まほう}のよこぶえをくれました。

そのよこぶえをふくと、聞^きく者^{もの}はみんな、やさしい心になって、どんなあらそいごとも、おそれも、にくしみもなくなつて